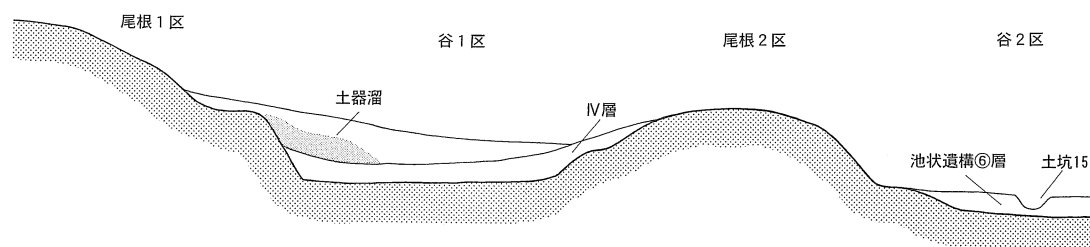


## 第10章 特論7. 奈良時代後期～平安時代の土器様相 —古市宮ノ谷山遺跡出土資料を中心に—

### 1. はじめに

古市宮ノ谷山遺跡の調査では、奈良時代後期～平安時代にかけての土器がまとまって出土した。近年八峠興氏によって山陰地方の当該期資料がまとめられ、その編年案が提示されてきている(註1)。ただ本調査地が位置する西伯耆においては当該期の資料に良好なものがなかったため、その位置付けは不明確な状況であった。しかし今回出土した資料は良好なセット関係を有し、層位的・型式学的な関係からそれぞれの変遷が追える。さらにそれらが一地点(調査地)で確認できるところが注目される点であり、今後検討していくための資料をここに整理し、提出したいと考える。

ここで扱う一括性の高い資料はテラス15およびIV層、土器溜、池状遺構⑥層、土坑15出土資料で、部分的に同一遺構面、包含層資料によって補うこととする。それぞれの層位的な関係をみると(図162)、谷1区においてはテラス15などのテラス群とそれらを覆うIV層があり、その上面に土器溜を含むIII層が堆積する。また尾根2区を挟んだ谷2区では、池状遺構⑥層を掘り込んで土坑15がつくられている。



### 2. 出土遺物の分類

出土遺物は須恵器と土師器があり、それぞれ皿(高台付)・杯(高台付)・甕がある。土師器皿・杯の中には赤色塗彩するものも存在する。このほか黒色土器(内黒)が各器種あり、これらを以下のように分類する。

#### ・皿

広く平らな底部で、短く立ち上がる口縁部をもつ。口径・底径比の差はあまりない。口縁部は直線的に外傾するもの(I類)とやや屈曲し外反するもの(II類)に分かれる。土師器は大半がII類に属する(262・598)が、須恵器には両類がみられる(242・241)。

#### ・高台付皿

上記の器形に高台が付く。高台は低く「ハ」字状に開き、体部への立ち上がり部分近くに付けられる。端部は面取りされるものや、外側にやや肥厚するものがみられる。須恵器はI・II類の両方がある(251・250)、土師器のものは出土しなかった。このほか黒色土器のものがある。口径・底径比の差があり、口縁は直線的に外傾する。底部が平底(451)と丸底(450)の2タイプに分かれる。高台は断面三角形に尖ったもので、やはり「ハ」字状に開く。

#### ・杯

底部から直線的に外傾するタイプ(I類)と、体部中位あたりから内湾するタイプ(II類)に大きく分けられる。I類には器高が3.0～3.5cmほどの低いもの(Ia類、200・605・602・396・608)と、4.0cmを越える高いもの(Ib類、200・605・602・396)に分かれる。Ia類の多くは体部ナデ調整の稜が目立たないのに対し、Ib類は目立つものが多い。さらに底部は平底とやや丸みをもつ2種類があり、底部裏をケズるもの、ナデ後押圧するものなどがみられる。

Ⅱ類では口縁端部が外反するⅡa類、そのままほぼ直立するⅡb類のふたつに分類できる。底部は回転糸切りを基本とし、それをナデ消すものやヘラ切りのものもわずかにみられる。

I類は須恵器、土師器ともにあるが、Ⅱ類は須恵器のみである。

#### ・高台付杯

底部から直線的に外傾するタイプが大半を占める。高台は1cm前後と高いⅡ類と低いI類に分けられ、底部は平底を呈すa類と丸底のb類がある。須恵器は口径・底径比の差があまりなく、器高は高い。体部中位からやや外反するもの(253)があるが、底部から直線的に外形するタイプ(255)がほとんどである。高台は低いI類しかない。

土師器は口径・底径比に差があり、体部に回転ナデの調整痕が明瞭である。I類では平底(Ia類、427・446・639)、Ⅱ類では丸底(Ⅱb類、434)が多い。また黒色土器は大半がⅡb類であるが、土師器高台付杯Ⅱb類も器表面をミガクなど、黒色土器と共通する調整技法がみられる(636)。

#### ・甕

土師器は体部の長いI類と体部が短く丸みをもつⅡ類に分けられる。I類には体部がほぼ直立的なもの(272・619)と、中位がはり、丸みをもつタイプ(276・620)がある。外面は縦方向のハケメ調整が目立ち、口縁部は緩やかに弧状を呈するものが大半を占める。底部まで残る個体がなかったため器高は復元できないが、口径は20～30cmの間にほぼ収まる。

Ⅱ類は土師器・黒色土器にみられ、口径20cm前後の小型、30～35cmの中型、40cmを越える大型の3タイプがある。頸部が「く」字状に屈曲し直線的に外傾する口縁部をもつ。頸部外面には指頭圧痕があり、体部は粗いナデ調整を基本とする。口縁部内面を丁寧ミガクものは黒色土器のみではなく、一部体部上半にも施される。体部が丸く中位がややはりだすタイプ(647)と、直立的なタイプ(648)に細分できようか。

須恵器は出土数が少ないが、Ⅱ類に相当しよう。ただ土師器と比べた場合、頸部がすぼまり、口径が小さいという違いがみられる。内面は同心円タタキと車輪状タタキ(259・626)の2種類がある。

### 3. 変遷 (図163)

先述したように今回の資料は層位的な関係から、谷1区においてはテラス15・Ⅳ層→土器溜、谷2区では池状遺構⑥層→土坑15という前後(上下)関係が明らかとなっている。さらにそれぞれの関係をの型式学的にみ、その前後関係を検討する。

まず谷1・2区それぞれの下層に位置するテラス15・Ⅳ層と池状遺構⑥層の資料をみる。皿・杯類では前者において須恵器の占める割合が高い。須恵器杯Ⅱa類が主体で、わずかにⅡb類が認められる。またI類はない。皿は高台付も含めI・Ⅱ類があり、高台付杯は器高が高い。またこれらの器壁は一様に厚みをもつ。土師器は赤色塗彩される。杯は器高の低いIa類で、口径・底径比の差があまりみられない。高台付杯のほか、脚部面取りする高杯もある。甕は長胴型のI類のみである。

一方後者では須恵器の比重は低く、赤色塗彩土師器も少ない。須恵器は杯Ⅱb類のほかI類がある。皿は高台付のもののみ(Ⅱ類)で、無高台のものはない。また高台付杯も出土していない。これらは先のものに比べ器壁は薄い。土師器は赤色塗彩された皿、高台付杯があるが、大半は塗彩されない。杯が多く、Ia類が主体で若干Ib類を含む。体部は回転台成形によるナデ調整痕の稜線が明瞭なもの、不明瞭なものがある。また口径・底径比には差がみられる。さらにこの層からはわずかではあるが、黒色土器が出土しており、高台付杯以外に小型甕もある。甕はI類だけでなく、丸みをもつⅡ類もみられる。

この二者を比較すると、前者のみに認められるものは須恵器皿、杯Ⅱa類、高台付杯であるのに対し、後者のみのは黒色土器、土師器杯Ib類、須恵器杯I類、甕Ⅱ類である。前者が須恵器主体で赤色塗彩土師器を含むのに対し、後者は須恵器、赤色塗彩土師器が少なく、黒色土器が存在する。また両者に共通する須恵器杯Ⅱb

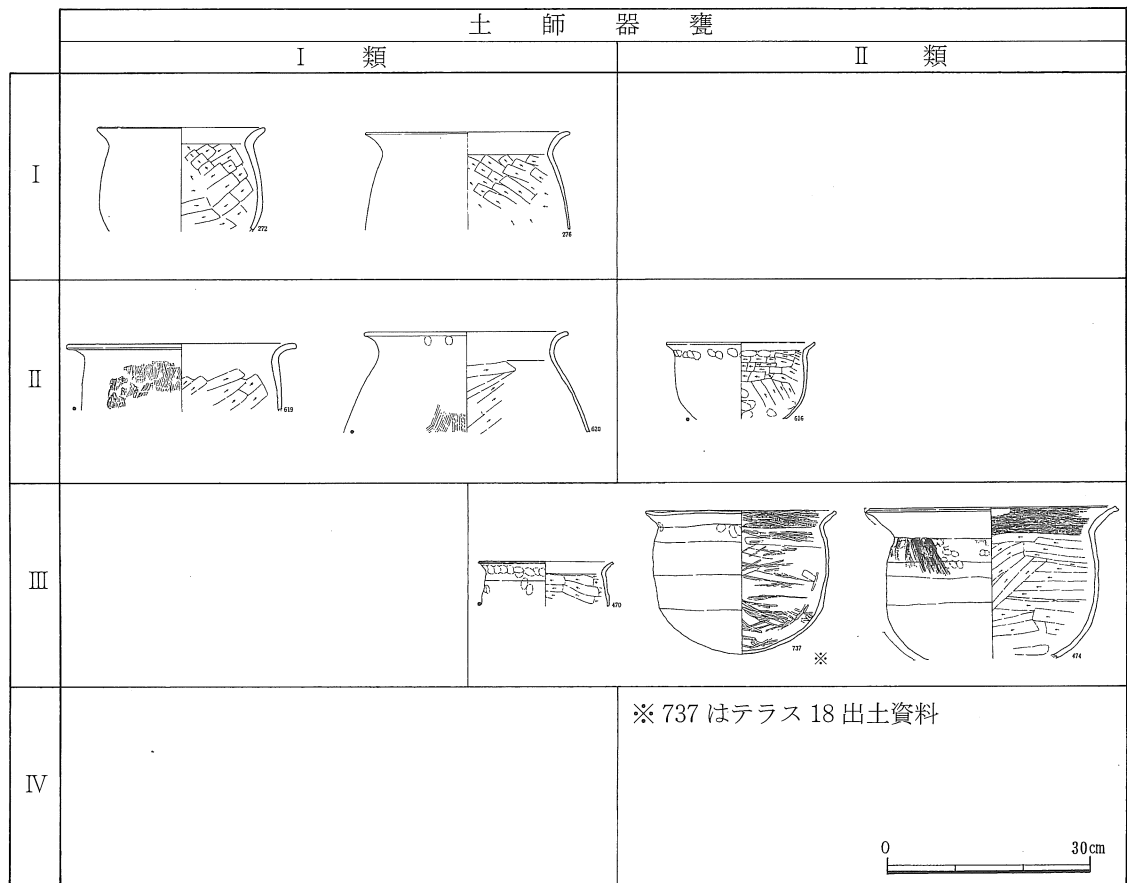
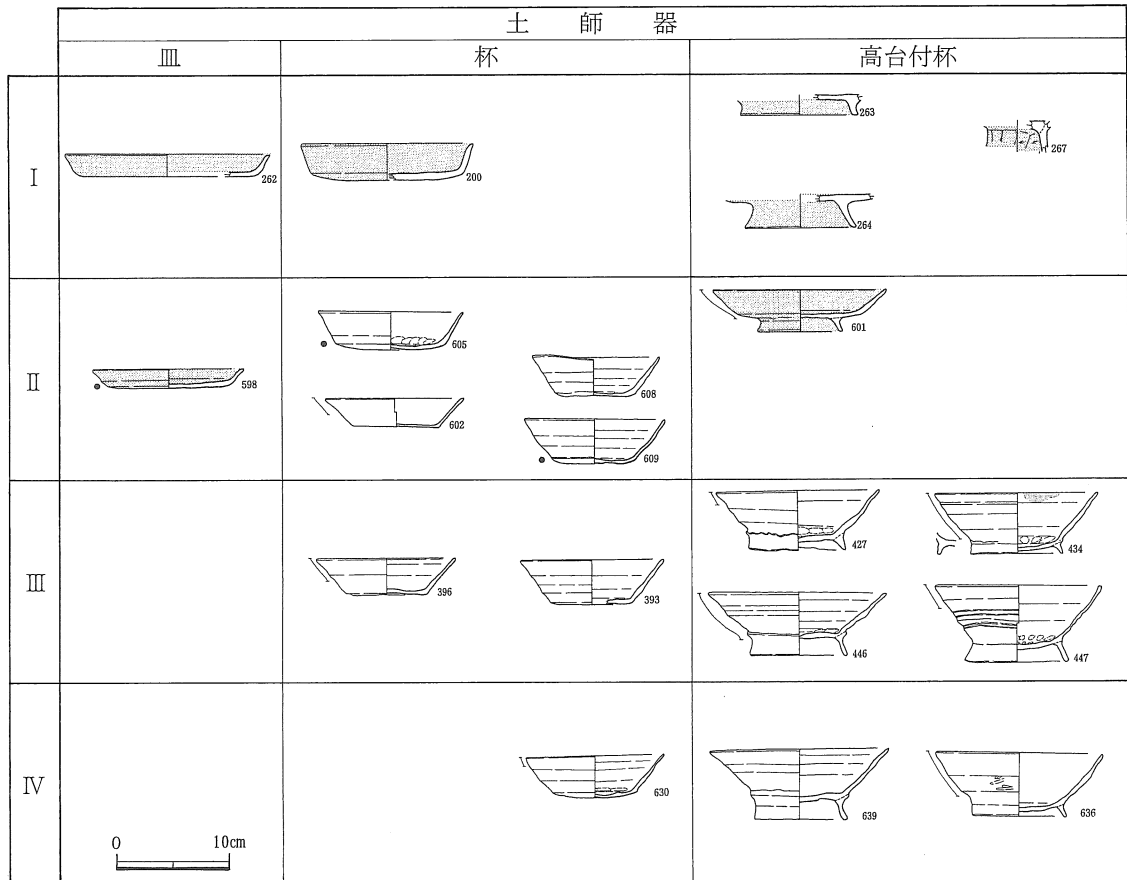
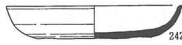


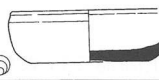
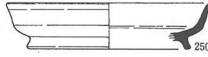
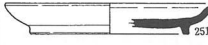
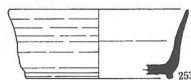
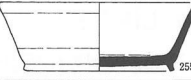
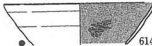

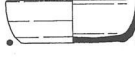
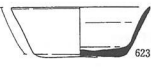
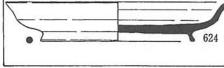





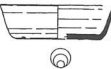
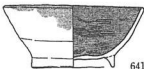




図 163 - 1 奈良時代後期～平安時代土器 (1)

黒色土器 高台付杯	土 師 器			
	皿	杯	高台付皿	高台付杯
	 242  241	 246  249	 250  251	 253  255
 614  615		 621  623	 624  622	
 458  450	高台付皿  450  451	 574		
 641  644				

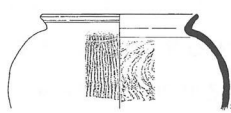

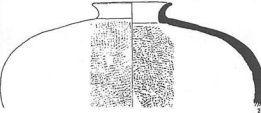

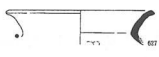

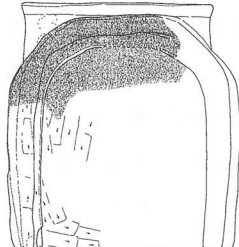
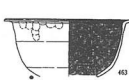
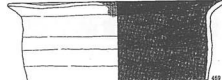
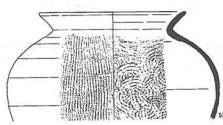




黒色土器甕	須恵器甕	その他
	 524  529	 561
 618	 627  626	 578
 643  639	 575  526	
 647  648		

図 163 - 2 奈良時代後期～平安時代土器 (2)

類や高台杯皿をみても、後者のものが器壁が薄いなど後者の方が後出的な要素を多く含む。

次に土器溜出土資料をみてみると、皿・杯類では土師器が大半で、須恵器はほとんどない。土師器は皿がなく、杯が主体となる。Ⅰ・Ⅱ両類あり、ナデ調整の稜線が明瞭なものが大半を占める。またこれに高台を付けたタイプがかなりみられ、中でも高台の低いⅠ類が多い。黒色土器は高台付杯のほか高台付皿がわずかにある。また甕はⅡ類が主体である。

これと池状遺構⑥層出土資料とを比較すると、土師器では皿がない。杯は池状遺構⑥層である程度みられた、体部にナデ調整の稜が目立たないタイプが少なく、大半は目立つ。底部をケズるものではなく、ヘラ切り後押圧するもののみで占められる。また高台付杯が多くあり、中でも足高のⅡ類が一定量みられる。甕ではⅠ類がほとんどなく、Ⅱ類が主体をなす。黒色土器では高台杯皿がみられ、さらに皿・杯類では須恵器がほぼ消滅するという違いが見出せる。須恵器の減少や土師器高台付杯Ⅱ類の存在などから、土器溜は池状遺構⑥層より後出のものできよう。

最後に土坑15出土資料をみる。須恵器はまったく含まず、土師器のみである。また皿もなく杯のみで占められ、いずれも回転台成形による。高台付杯はⅡ類が主体を占め、Ⅰ類は黒色土器と器形が類似し、体部をミガクものであった。また甕は内面黒色のものしかない。須恵器皿・杯をまったく含まず、土師器高台付杯がⅡ類主体である点、杯は体部ナデの稜が明瞭なもののみである点など、もっとも新しい様相を呈する。

以上のことから、テラス15・Ⅳ層→池状遺構⑥層→土器溜→土坑15という変遷が考えられ、これらをⅠ～Ⅳ期とする。

#### 4. 編年的位置付け

前節で設定したⅠ～Ⅳ期の時期的な位置付けについて、皿・杯類を中心に検討していく。

Ⅰ期の須恵器の構成をみると、底部回転糸切りの杯や、体部が直線的に外傾する高台付杯などは出雲国庁第4形式（8世紀後半～9世紀初頭）<sup>(註2)</sup>や安来市高広遺跡ⅣB期<sup>(註3)</sup>に相当すると考えられる。また本調査地に近い陰田遺跡群において須恵器編年が組まれている<sup>(註4)</sup>が、それによれば底部回転糸切りの須恵器杯の出現期を陰田10期（8世紀後半）とし、そこに直線的に外傾する高台付杯は含まない。これは出雲国庁の第3形式に比定される<sup>(註5)</sup>ことから、Ⅰ期は陰田10期に後続する時期（8世紀末～9世紀初頭）とすることができよう。

続くⅡ期以降土師器が主体となり須恵器は減少していくが、この傾向はすでに八峠氏が地域の特徴として指摘している。つまり出雲や因幡では引き続き須恵器主体であるのに対し、伯耆では土師器が中心であり、さらに西伯耆の方が東伯耆に比べ須恵器の割合は高いという<sup>(註6)</sup>。

Ⅱ期においてⅠ期の要素を引き継ぐものとして、赤色塗彩土師器皿や杯、高台付杯、須恵器杯Ⅱb類や高台杯皿などが挙げられる。比較的多くの要素がある点から、Ⅰ期と時期的に大きく隔たらないと考えられる。また新たな要素としては、回転台成形の土師器（回転台土師器、<sup>註7</sup>）、黒色土器、甕Ⅱ類がある。黒色土器はわずかではあるが、底部丸底のいわゆる「椀形」を呈すものである。土師器杯には回転台成形ではないものもある程度認められるため、回転台土師器の出現期に近い時期が考えられる。須恵器杯Ⅰ類は高広遺跡Ⅴ期に類するものであり、以上のことからⅡ期は9世紀の前半に相当しよう。

Ⅲ期は回転台土師器で占められる。高台付杯にはいわゆる足高高台とされるものがある。これについては11世紀代に出現するとされている<sup>(註8)</sup>が、10世紀前半を下限とする伯耆国庁第2段階に比定されるSD38に類例があり<sup>(註9)</sup>、出現期を遡らせて考える必要がある。また黒色土器をみると、体部は丸みをもたず土師器同様直線的に外傾する。高台付杯には底部が平底の「杯形」と丸底の「椀形」があり、さらに高台杯皿が伴っている。この黒色土器のあり方は武田氏の古代後Ⅱa期<sup>(註10)</sup>に相当すると考えられる。先の伯耆国庁第2段階と合わせ9世紀後半に比定しておく。

Ⅳ期は器種のヴァリエーションがもっとも少ない。土師器高台付杯は足高なⅡ類が主体となるもののⅠ類も含

み、また黒色土器高台付杯は「椀形」、「杯形」両方が存在する。Ⅲ期から続くものとして10世紀前半あたりであろうか。

甕はⅡ期において体部に丸みをもつⅡ類が出現し以後主流となっていく一方、Ⅰ類は消える。

## 5. おわりに

以上大まかに古市宮ノ谷山遺跡出土資料の変遷、および編年の位置付けについてみてきたが、限られた時間の中では検討しきれない課題も多い。

まず8世紀末～10世紀前半の年代を与えたが、とくにⅢ・Ⅳ期の年代観については今後さらなる検討が必要となつてこよう。9世紀後半～10世紀前半は隣接する出雲地域では古曾志平廻田遺跡や渋山池遺跡で須恵器の窯跡が検出され<sup>(註11)</sup>しており、その並行関係を押さえる必要がある。出雲が須恵器主体、伯耆が土師器主体という地域差があり、これらをつなぐ良好なセット関係の出土が待たれる。

その地域差に関してみると、鳥取県南西部の山間部に位置する日南町霞牛ノ尾遺跡A地区<sup>(註12)</sup>では、渋山池遺跡須恵器窯1に類する須恵器が土坑27からまとまって出土している。ここからはほかにK90窯式に比定できる灰釉陶器高台杯皿が出土しており、9世紀後半～10世紀初頭に位置付けられよう。しかし土師器は伴っておらず、須恵器主体というあり方は西伯耆と異なり出雲に近い様相を示す。

黒色土器は今回良好な資料が出土した。とくに土器溜は土師器焼成と関連するものであり、在地土師器と同じ技法を用い、最終的により丁寧に仕上げるだけの差であることがわかった。黒色土器生産の全国的な流れの中で、今後検討していかねばならないと考えられる。

なおこれらの土器については胎土分析も行った(第10章特論6)。今回同時期と考えられる米子城跡21遺跡SK17出土資料<sup>(註13)</sup>についても合わせて行ったが、胎土は異なるという結果であった。本調査地からは直線距離で5kmほど離れている。今後こうした胎土分析からその流通範囲なども復元していきたい。(中森 祥)

最後になったが本稿を成すにあたっては、山陰中世土器検討会において下記の方々から多くのご教示をいただいた。記して感謝いたします。(順不同、敬称略)

八峠 興、西尾克己、廣江耕史、丹羽野 裕、平石 充、榊原博英、百瀬正恒、重金 誠、武田恭彰、池澤俊幸

(註)

1. 八峠 興 1998「山陰における中世土器の変遷について—供膳具・煮炊具を中心として—」『中近世土器の基礎研究』XⅢ  
1999「山陰における平安時代の土器・陶磁器」『第18回中世土器研究会報告資料』  
2000「山陰における平安時代の土器・陶磁器について」『中近世土器の基礎研究』XⅤ
2. 町田 章ほか編 1970『出雲国庁跡発掘調査概報』松江市教育委員会
3. 石井 悠ほか編 1984『高広遺跡発掘調査報告書』島根県教育委員会
4. 萩本 勝、佐古和枝 1984「第4節 須恵器について」杉谷愛象ほか編『陰田』米子市教育委員会
5. 加藤和枝 1988「山陰地方中部における横穴墓出土の糸切り痕のある須恵器について」森 浩一編『考古学と技術』同志社大学考古学シリーズⅣ
6. 註1、八峠2000、P. 174
7. 武田恭彰 1994「岡山県における回転台土師器の成立と変遷」『中近世土器の基礎研究』X
8. 橋本久和 1995「山陰」中世土器研究会編『概説中世の土器・陶磁器』真陽社
9. 金子裕之ほか編 1979『伯耆国庁跡発掘調査概報』(第5・6次)倉吉市教育委員会
10. 武田恭彰 1999「第4節 林崎遺跡出土の古代土器について」『奥坂遺跡群』総社市教育委員会
11. 足立克己ほか編 1989『古曾志遺跡群発掘調査報告書』島根県教育委員会  
椿 真治ほか編 1997『渋山池遺跡・原ノ前遺跡』島根県教育委員会
12. 濱 隆造・中森 祥ほか編 2001『霞遺跡群』鳥取県教育文化財団
13. 湯村 功・中森 祥ほか編 1998『米子城跡21遺跡』鳥取県教育文化財団